イーシュワランマ

この上ない崇高な関係

シュリ・サティヤ・サイ・セントラル・トラスト理事
R. J. ラトナーカル氏

毎年、「イーシュワランマ・デー」には貴重な思い出がよみがえります。実際それは、神のご両親のサマーディ〔墓所〕を訪れる度に思い出されるのです。 恒例の行事として、今年（2017 年）も、母イーシュワランマ様と、父ペッダ・ヴェーンカマ・ラージュ様のサマーディの真ん前にあるお2人の像に花輪を掛けて祝った後、贅を凝らしたプラサーダムが皆に振る舞われました。その日の中でも特に、彼女の周りに座ってスイート・ライスやタマリンド・ライス（南インドのお祭用の混ぜご飯）を美味しそうに食べる人々を眺めるこの瞬間を、母君は最も大切に思われていたに違いありません。 母君の惜しみなく与える性質や優しい心について語る時、スワミがよく感極まっていらしたことを、私は決して忘れることができません。

イーシュワラがイーシュワランマを思って喜ぶ時

何年も前に、ある人が、サリーを配られている貧しい女性たちの真ん中に立つ、聖母イーシュワランマ様のお写真をスワミに送ってきたことがありました。 そこにいる母君はとても嬉しそうに見えました。実際、至福の瞬間、彼女はスワミがなさるように空中で両手を動かしていたのです。写真家はタイミングよくその姿を捉えていました。 それは美しいお写真でした。最愛の息子のような仕草をして、崇高な喜びを表にあらわしていた母君。その写真の完璧な説明文は、「この息子にして、この母あり」でしょう。

バガヴァンがこのお写真をごらんになった時の喜びは計り知れませんでした。
「見てごらん！ 見てごらん！ なんて幸せそうなんでしょう！ 彼女は空中で手を回していますよ！ 」
子供のように興奮した笑顔を見せて、スワミは私にその写真をお見せになりました。その日のスワミの至福（アーナンダ）は筆舌に尽くし難いものでした。天界の喜びが地上に舞い降りてきたのです。

似たような 2 つの出来事が私の心に浮かびました。1 つは、ある帰依者が、地味な茶色のサリーを着た普段着の母君がアシュラムの中で立っている写真を送ってきた時のことです。背景に普通の部屋が並んでいる所からすると、それは 60 年代に撮られたものでしょう。スワミはその写真を見て、ただただ喜んでおられました。無邪気な笑顔を見せて、**「見てごらん！ とても素敵な立ち姿ですよ！」**とおっしゃり、母君の写真を長い間ずっと見つめていらっしゃいました。また別の時、スワミは地面に敷いた藁のマットの上に座っている母君の写真を見ておられました。いつものように、母君の服装はまったく飾らないものでした。彼女の存在からは気取りのなさがにじみ出ていました。

まったく周りの目を気にしない様子で座っている母君を見て、スワミは静かにクスクス笑い、「きっと美味しいランチを食べたのですよ。今、彼女はくつろいでいるのです。そうでしょう？」と言って私を見上げられました。
私はただ頷くことしかできませんでした。その時に見たスワミの瞳の輝きは、とても感動的でした。

（スワミと母君の）この関係を言い表すのは本当に難しいことです。この宇宙のすべての愛の宝庫であるお方が、その抗うことのできない愛の輝けるレプリカ（複製）であるお方を見て、心を溶かしておられたのです。母君のハートも、宇宙の幸福のためだけに鼓動していました。たぶんそういうわけで、母君のハートはあんなにも主のハートに共鳴していたのでしょう。 そのような崇高な愛の物語が、急速に過ぎゆく時間の中でも失われず、毎年変わらず反芻されるように、スワミは母君がスワミに帰融されたその年から、「イーシュワランマ・デー」をお祝いされるようになりました。

なぜ 2010 年の「イーシュワランマ・デー」は歴史的だったのか

バガヴァンはいつもこの日にサマーディを訪れ、ご自身の手で神の母君と父君に花輪を掛けられました。そして、母君に捧げるサリーにはとてもこだわっておられました。その行事の何日も前からご自分で注意深くサリーをお選びになり、それはいつも明るい色だったのです。

その日が近づくにつれて、バガヴァンはサマーディを何度も訪れるようになり、そこに集まる人々のための準備は整っているか、当日配られる食べ物や衣服の用意はできているかを確認されました。バガヴァンはすべてに関与し、指示なさっていました。

2005 年の 5 月、スワミはブリンダーヴァンにいらしたのですが、イーシュワランマ・デーが近づくと、サリーとドーティを積んだ車で私をプッタパルティに送り、そこで私に適切な準備をさせ、すぐにスワミも到着されました。スワミは、プッタパルティが暑くて乾燥していることも、そこに集まる人々の数がほんのわずかであることも、気になさいませんでした。

2010 年、スワミの肉体年齢は 85 歳でした。スワミは車椅子に乗っていたにもかかわらず、サマーディの中に入ることを主張して、自ら母君の像にサリーを掛けられたのです。控えめに言っても、その光景はとても感動的なものでした。実際、母君と父君の白い大理石の像が安置されたのは、その年のことでした。ジャイプールの一人の彫刻家が、石で表現できる最高の形で母君と父君のお姿を彫って像を創作できたのは、まさに神のご意志だったのです。

それらの像を見たバガヴァンは我を忘れて喜ばれ、1 ヶ月以上もの間、ヤジュル・マンディールの住居の 1 階に像を置いて、部屋から出るたびに愛おしそうにごらんになっていたものでした。

時として、付き添いの少年たちがそれらの像を美しい花々で飾ったりすると、スワミは非常に喜ばれ、このようにおっしゃったものです。**「ごらん、彼女はなんと美しく見えるのでしょう」。**スワミはよくこれらの像の周りを回って、次のようにおっしゃいました。**「彼女の髪がとてもきちんと編み込まれているのがわかりますか？ 彼女のキラキラ光るイヤリングを見ましたか？」**

そして、スワミはとても満足して、**「あの彫刻家は素晴らしい仕事をしました」**とおっしゃいました。

その1ヶ月間のご両親の像に対するスワミの接し方のすべてが、大切な教訓になりました。アヴァター（神の化身）との絆は、地上の時間や人間関係を超えたところにあるのですが、それでもスワミは、母親との絆がどれほど神聖で至高のものであるかを力強く伝えてくださいました。

どのような人であっても、母親は常にその人の人生の根源的存在であるべきだ、ということをスワミは身をもって示されたのです。

神のご計画により、バガヴァンが肉体の姿でお祝いされた最後のイーシュワランマ・デー（2010年）に、これらの像が安置されたことは、実に意義深いことです。

ご両親の墓所を訪れる大勢の訪問者たちに情報を提供し霊感を鼓舞するため、お二人の人生の一端が御影石に刻まれ、2017 年 5 月 6 日に除幕された。

たぶんスワミは、この伝統を私たちの心に刻みつけたかったのと同時に、ご両親が眠っていらっしゃる場所が、今まで以上に栄えることを望まれていたのだと思います。

今日、この空間は、クリシュナ神やダッタートレーヤー神の美しいご神像も祀られている本当の聖地になっています。そして特筆すべきは、ここには非常に高くそびえる椰子の木々があり、心地よい風が一日中吹いています。 神のご両親のもとを訪れる度に、過去への感傷的な思いに浸らずにはいられません。「イーシュワランマ」という言葉に言及するだけで、スワミの目に涙が浮かび上がる光景は、私の存在そのものを揺さぶります。

母君には大勢の子供や孫たちがいましたが、最期の瞬間は、他のだれでもなくバガヴァンの名前だけを呼び、バガヴァンがすぐそれに応えられたことを思うと、私には聖典が生き生きとよみがえったかのように思われるのです。これは、私たちが深い教訓を学ぶべき一つの伝説的な瞬間でした。

アヴァターはただ教えるためだけに降臨されます。適切な教えを伝えるためであれば、どこまででも行かれるでしょう。速く学べば学ぶほど、私たちにとっては良いのです。そうすれば、私たちも神そのものである至福を体験し、至福になることができるのです。

ラジオ・サイ・チーム

出典：http://media.radiosai.org/journals/vol_15/01MAY17/A-Relationship-That-Can-Get-No-Higher.htm